

湘南医療大学

ティーチング・ポートフォリオ

湘南医療大学
保健医療学部看護学科
関谷 潤
作成日:2024年8月30日

1. 教育の責任

本学の建学の理念は、「人を尊び、命を尊び、個を敬愛す」である。

人のふれあいを通して、他者を思いやり、生あるもの全てに感謝し、その人らしさを大切にする教育を実践し、全ての人々の幸せに役立つことを期している。

現在まで自身が担当した科目は、看護学科1年次「基盤実習Ⅰ」、看護学科2年次「基盤実習Ⅱ」、3年次講義科目「ナースングプロセスⅡ」および「成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ」、4年次「統合実習」である。また、これまでチューター、国家試験対策員会、実習委員会などで活動を行っている。実習では学生が各実習目標を達成できるよう、学生の学習や疾患の学習進捗度や理解度を確認しながら、学生を支援している。同時に、実習病院と事前の打ち合わせを行い、学生が各科目の目的・目標を理解し、学生自身で目標を達成することができるよう、実習開始後は実習指導者と連携をとりながら、学生を支援している。ここでは、建学の理念である、「人のふれあいを通して、他者を思いやり、生あるもの全てに感謝し、その人らしさを大切にする教育」を大切に、学生とともに考え学ぶことを意識している。

また、学内の教育活動においては、学生が大学生活において安全に安心して学業に専念することができるよう支援することを責務として活動を行っている。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

教育は、学ぶことの楽しさを体験してもらうこと、興味・関心を持つきっかけを撒くことと考えている。

「学ぶ」ことの大半の時間は、知らなかったこと、知らないことを学ぶことにあてられていると考える。たくさん勉強科目の中で、教育の大半は、教えられることが特徴であると考えている。その「教えられる時間の中で、知らなかったことを知る」体験の中で、何か一つでもわくわくするような体験をすることができたとき、それまでの学びを体験の中で活かした時の喜びは非常に大きく、学んで良かったという実感と達成感を得るのだと思っている。そしてその実感と達成感を期に知らなかったことを調べたり、実践したりを繰り返し、枝葉が分かれて成長していく木のように、学びが広がっていくと考える。

また、学ぶ喜びを共に喜び、楽しんでくれる存在がいることも、学び、興味を持ち続けることに、力を与えてくれるものである。

大学の講義で受けた勉学のリアルを身をもって体験するのが臨地実習である。実際の患者を受け持つ実習は学生にとって学習をはじめ大変なことも多い。しかし、その実習の中だからこそ、真剣に真摯に患者と学習に向き合うことができると考える。こと体験の中で、「看護は面白い、もっと知りたい」と思えるきっかけを作りたいと考えている。

2) 理念をもつに至った背景

自身が看護学生の際に、受け持った患者すべてを鮮明に覚えているわけではないが、中でも自身がずっと記憶に残っている患者は存在する。その時新鮮に感じたことや興味深く学んだことは、臨床で看護師となった際にも、非常に役立っている。学生時代、受け持ち患者に行う退院指導を計画した。退院指導のパンフレットに「尿が赤い場合は受診をしてください」と書いた。実習指導者から「赤いってどんな色のこと？私が考える赤と、あなたが考える赤は違うかもしれないよ」と話された。指導内容を考えることで頭が一杯であった私にとって、「自分と他者が考えることは同じではない」「他者がわかるように説明することとはこういうことなのか！」と衝撃を受けたのである。そしてその気付きは、疾患を理解する際にも、患者に説明できるためには、どのように説明すれば理解しやすいだろうかということに繋がっていった。そのためには、自身が疾患を正しく理解しなくてはならないのだと実感した。そして、学びに面白さを感じると、学ぶことが楽しくなり、学んだ知識を経験とともにどんどん吸収できる楽しさも実体験をした。

3. 教育の方法・戦略

1) 病院実習での学生指導

病院実習時、受け持ち患者に必要な看護援助を学生自身が考え立案することができるよう、立案する内容について、学生自身が捉えられている患者像や学習、今後の方向性をまず確認し把握する事から始める。学生が、何に困っているのか、何に悩んでいるのか、を私自身が理解し、次に学生と一緒に「困っていること、悩みを改善するのに何が 필요한のか」、「次に何が分かれば、不安なことや、疑問や悩んでいることが改善されるのか」を考える。答えを与えるのではなく、「考えること」から、「こういう時には、こうすればいいのか」「では、次にこれはどうなのだろうか」という発見や関心を広げられるよう学生に関わる。また、学生が実施する看護援助について、事前に確認をし、追加修正することがないか学生が得ている情報や私自身が得ている情報や指導者に状況を確認しながら、援助方法を事前に確認する。学生とともに実施し、援助後に振り返りを行なうことで、学生の気付きを、今後の援助に活かすように関わる。具体的には、学生の気付いた点を、どう工夫をすると翌日以降の援助をより良いものに発展することができるのか。重要なのは「できなかった」ではなく「今日実践してみて気付くことができた。その気付きを次につなげていこう」とポジティブに変換することである。看護援助を指導する際には、その学生が将来臨床で看護師として患者に援助することにつながっていることも意識している。

2) 技術演習計画の立案

大学内での技術演習計画の立案では、自分たちが実践する技術が、患者にとってどのような意味を持つのか。なぜこの技術を実践する必要があるのか、学習を何に活かしていくのかを学生に意識づけできるように、計画を立案している。演習後にはリアクションペーパーを記載してもらい、演習を通してなにを感じ、気付き学んだのかを確認し、次回以降の

演習立案時に、目標や目的に活かしている。

技術演習では、学生が円滑に演習を実施することができるよう教員を配置するように留意しながら演習を組見立てるなど工夫を行ない、他教員から助言をもらいながら立案している。

4. 学習成果

学生から、病態生理や学習内容に対しての質問が積極的に聞かれるようになった。

学生が分からないことなどを質問してくるようになった。また、学生同士で、相談し合う様子もみられるようになってきた。

教育活動を通して、学生の態度に変化が現れた(連絡がとれなかった学生が、自ら教員に連絡を入れるようになった)。

5. 改善のための努力

限られた実習時間の中で、担当する実習学生に対し、指導で関わる時間を余裕を持って作ることができるよう、実習指導者と密に連携を取り、時間の確保につとめる必要がある。実習前日に翌日の行動予定表を指導者に相談しながら学生が作成しているが、その中に、学生への指導時間を予め設けておくことで、改善することができると思う。

6. 今後の目標

短期目標

学生が達成感をもって実習を進めることができる。これまで学習したことが、実際の看護で生きる体験を積み重ねることで、学習の成果を実感し、達成感を得ることで、学生が次の学習意欲につなげていけるよう意識して関わる。達成時期は 2025 年 3 月末日。

長期目標

達成感や学習の成果を実感し、実際に学習行動をとることができるよう学生に関わる。短期目標では意欲を引き出し、長期目標では、実行動につながることを目指して関わっていききたい。

【資料】

- 1.シラバス「ナーシングプロセスⅡ」
- 2.シラバス「看護基盤実習Ⅰ」
- 3.シラバス「看護基盤実習Ⅱ」
- 4.シラバス「統合実習」
- 5.看護学科臨地実習授業評価アンケート集計結果「成人基盤実習」
- 6.看護学科臨地実習授業評価アンケート集計結果「成人看護学実習Ⅱ」